

埼玉スタジアムはいつでも真っ赤に染まる。5万人を超える浦和サポーターのほとんどが赤いユニホームを着飾り、客席は赤い壁と化す。浦和のグッズ販売収入はリーグ最高の年間八億円超。その数字を思い浮かべつつ、客席の壮観なさまを目にし、我々はときに「まるで欧州のスタジアムのようにだ」といつかやく。



## フットボールの熱源

だが、それは勘違いであることに気付く。最近、イングランド人の知人に打ち明けられた。「子供のころはああやってユニホームを着て競技場に通ったんだけどねえ」。イングランド3部のフライトン・アンド・ホープ・アルビオンのサポーターである彼が言うのだ。えっ、いまは？ 「もう着て行かないなあ」

## 染まる客席は日本の文化

普通の格好で行く。それは分かる。でもホームなら危険はないはず。「だけど、あんな格好で歩くのってファッショナブルじゃないでしょ。子供ならいいけど、30歳を過ぎたら……」。3年前の昇格プレーオフに「きょうは特別な試合だ」と、気合を入れてユニホーム姿で出掛けると、友人に「オレにはそんなマネはできない。オタクだと思われるぞ」と白い目で見られたという。確かに、欧州ではほとんどどのファンがマフラーをかぶる。でも帽子で支持するチームを表しているが、ユニホームまで着込んでいる大人は意外に少ない。浦和や新潟、仙台の試合のように、観客席が完全にチームカラーで染まるさまは見たことがない。つまり、徹底した「染色活動」は日本独自の文化と言っている。あの人だならぬ景観を前に「日本人の横並び志向や排他性」を論じる人もいるだろうが、そんなヤボなこととは言わず、独特のムードを楽しんだほうがいいのかも。(吉田誠一)